



令和2年8月号



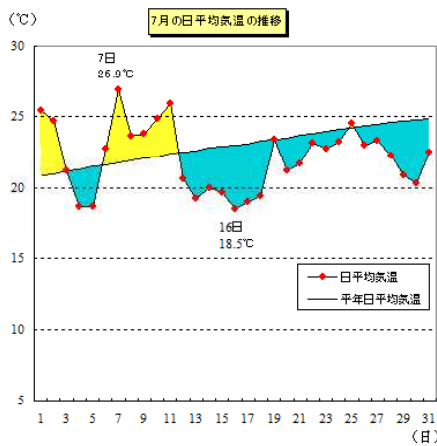
梅雨

6月11日に梅雨入りした関東地方は、8月1日に梅雨明けしました。平年に比べ11日遅く、昨年より8日遅くなりました。

今年の梅雨
梅雨入り 6月11日 (平年より3日遅い)
梅雨明け 8月1日 (平年より11日遅い)
梅雨の期間中の総降水量 394.0mm
日最大降水量 39.5mm(6/28)
梅雨の期間中の日照時間 115.8時間
梅雨の期間中、6月17日、7月20日の2日間を除き、毎日降水を観測しました。なお、梅雨の期間は秋に再度検討されるため、変更される場合があります。

7月の気候

7月の月平均気温は22・1度と、平年より低い気温となりました。月の平均気温が平年より低くなったのは、4月以来です。月の前半は気温の高い日もありましたが、中旬以降は、平年を下回る日が多くなりました。雨の日が多くなったため、降水量は、197ミリと平年の121%と多くなりました。日がさしている時間も短くなり、日照時間は22・3時間と、平年の17%にとどまり、年間を通して、月合計日照時間の少ない記録を更新しました。



1カ月予報 (気象庁発表)

8月は、晴れの日が多く、気温は平年より高い、降水量は平年並みか少ない、日照時間は、平年並みか多い予想です。

7月のお天気解説

令和2年7月豪雨

令和2年7月3日から7月31日にかけて、日本付近に停滞した前線の影響で、継続して暖かく湿った空気が流れ込んだため、九州、東海、甲信、東北地方において大雨となり、河川の氾濫や浸水、土砂崩れが相次ぎました。7月4日には、熊本県と鹿児島県の一部に、7月6日には、福岡県、佐賀県、長崎県の一部に、7月8日には岐阜県と長野県の一部に、大雨の特別警報が発表されました。いずれの場所も、活発な雨雲が線状に並び、次々と同じような場所を進む「線状降水帯」が発生し、一晩で、特別警報クラスの雨が降ったため、河川の氾濫や、低地の浸水、土砂崩れによる被害が発生しました。

特別警報が発表された地域以外でも、山形県や大分県などにおいて、河川の氾濫などによる、被害が発生しています。気象庁の全国の観測地点における7月上旬の降水量の総和は、今回最も多くなり、1時間に50ミリ以上の雨の回数も、過去最多を記録しました。

天気用語の基礎知識

低気圧

地上天気図などで、周囲よりも気圧が低く、閉じた等圧線に囲まれたところのことを言います。周囲との比較のため、高気圧と同様に気圧の基準はありません。日本付近で年間を通して発生する低気圧は温帯低気圧であり、南北の温度の差などにより、発生・発達します。水平スケールは数千キロメートルにおよび、温暖前線や寒冷前線などの前線を伴うことが多くあります。

………神峰の山から………

顕著な災害をもたらした自然現象に対して、気象庁は名称を定めています。今年の「令和2年7月豪雨」がそのひとつですが、今までに32の気象現象に名称が定められています。年代別に見てみると、1950年代は4、60年代は7、70年代は3、80年代は2、90年代は1、2000年代は6、10年代は8、20年は1、となっており、60年代も多いですが、2000年以降は特に多く、20年間だけで全体の45%も占めており、毎年のように顕著な災害が発生しています。

7月は台風がひとつも発生しませんでした。8月になるとすぐ発生するなど、気が抜けません。